

Key words

民陶の里・小鹿田、民芸運動（柳宗悦、濱田庄司、河井寛次郎、バーナード・リーチ）、産業革命、唐臼、国の重要無形文化財、ポスト・コロナ

1. 柳宗悦と小鹿田の出会い

江戸後期、日本の庶民の生活工芸は成熟期を迎えていました。焼き物などの生活雑器は、各地方の生活様式に合ったものが、その土地に住む人々の手によって生み出されていました。しかし明治以降、近代科学技術の導入によって大量生産が可能となり、工業化された陶器製品が、各地にあった小さな民窯を駆逐していきました。

産業革命で失われた手仕事の良さを見出し復活させるアーツ・アンド・クラフツ運動を、英国で展開したのはウィリアム・モリスでした。

日本では、柳宗悦〔やなぎ・むねよし〕（1889-1961）が民芸運動を提唱しました。柳は1925年暮れ、陶芸家の濱田庄司、河井寛次郎らと共に「民芸」という言葉を造りました。「民芸」とは民衆的工芸のことです。無名の工人が庶民の為に作った日常雑器などの中に美を見出し、世間に紹介していこうという運動です。民芸運動は今も日本民藝館（東京・駒場）を拠点に続けられています。柳は日本全国の手仕事を発掘する旅を始め、1931年、小鹿田〔おんた〕を訪れました。

柳は著書で小鹿田についてこう記しています。「九州に窯は沢山ありますが、おそらくこの日田の皿山〔註〕ほど、無疵で昔の面影を止めているところはないでありましょう。（中略）昔の窯場がどんな様子であったかを思いみる人は、現にあるこの小鹿田の窯を訪ねるに如くはないと思います」（〔註〕皿山：生活用の焼き物を作っている里のこと）『手仕事の日本』（1948年）

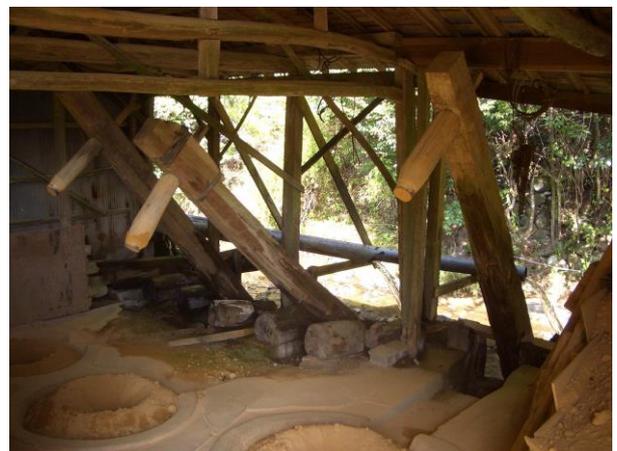
2. 初めての小鹿田訪問

大分県に住む大家君（17期）の「九州へ来たら、いつでも案内してやる」という言葉を真に受け、夫婦で出かけました。2009年10月のことです。小倉で新幹線から日豊本線へ乗り換え。中津と別府に泊まり小鹿田を往復して大分空港から帰る旅程です。中津駅前待合わせ。中津は福沢諭吉

が幼少年期を過ごした町です。料理屋で新鮮な瀬戸内の幸を肴に、麦焼酎「学問のすすめ」を飲みました。本の形をした陶器製の瓶が洒落ています。少し頭が良くなったような気がしました。

翌日は、大家君の運転で中津から別府まで南下。カブトガニの生息する中津干潟（子供の頃、尻尾を掴んで振り回して遊んだそうです）に寄ってから、宇佐八幡宮を参拝しました。宇佐農業高校〔現：宇佐産業科学高校〕での教員時代、後に大相撲力士になる垣添〔現：雷（いかずち）親方〕が在籍しており、大家君は垣添と相撲を取ったとのこと。垣添は自らこけて「先生、つえー」と言ったそうです。「垣添君に勝った先生は俺だけだ」、車中でそんな話を聞かされながら、国東半島の熊野摩崖仏や富貴寺の国宝阿弥陀堂などを見て回りました。別府・鉄輪温泉まで送り届けてもらい、別れました。社会科の先生の解説付きドライブで、大分県のことがとてもよくわかりました。

次の日、レンタカーで大分自動車道を西進し、日田市の山中にある小鹿田に向かいました。日田盆地から小野川（筑後川水系）を北へ、支流の皿山川沿いに30分ほど車を走らせると、こぢんまりとした小鹿田の集落（戸数14）が現れました。耶馬日田英彦山国定公園の中に位置しています。英彦山〔ひこさん 1,199m〕に連なる峰々の谷間にある、日田杉の美林に囲まれた集落は標高430m。日照時間が短く標高も高いので気候は冷涼で、炬燵がいらぬのは夏の間だけです。集落の高台にある小鹿田焼陶芸館の前に車を止めました。焼き物の里は静かにたたずんでいました。聞こえてくるのは、小川のせせらぎ、そして唐臼〔からうす〕の響きだけ。唐臼の杵音が谷あいこにこだまし、ここだけは別の時間が流れているようでした。



【①唐臼（杵が辛抱強く土を砕く）】

と、普段は静かな小鹿田なのですが、あいにく僕らが訪れた日は民陶祭（10月）の打ち上げだったのか、陶芸館の2階に陶工たちが集まりカラオケ大会（？）の真最中でした。マイクを通した歌声が村中に響き渡っていました。小鹿田焼の窯元で構成される小鹿田焼技術保存会は1995年に国の重要無形文化財の保持団体に認定されました。個人が認定された場合は人間国宝と呼ばれます。ということは、陶工みんなが、いわば「人間国宝」なのです。

ゆるやかな坂道を下りながら、一軒ずつ窯元を訪ねました。「人間国宝」たちがカラオケで出払っていたので、窯元はどこもひっそりとしていました。お気に入りの焼き物を買うには、居間の炬燵で寝ている店番の奥さんを起こさねばなりませんでした。



【②窯元に並ぶ器（上段の大皿は飛び鉦）】

3. 小鹿田焼の特徴

- 1) 窯元は一子相伝の世襲制。1969年から窯元は10戸。（2019年、後継難で1戸が廃窯し9戸に）。
- 2) 小鹿田焼は、「用の美」をかなえる生活雑器。製品に個人名を印さない。銘は「小鹿田」か「おんた」。
- 3) 手仕事による家内工業。すべて人力と自然エネルギーで賄う。陶土を粉碎するための唐臼は水力。登り窯の燃料は薪（杉の丸太を製材する時の割り落とし）。成形は電動ろくろ（回転台）を使わず、蹴ろくろや手回しろくろで行なう。
- 4) 地産地消。集落全体の地質は厚い陶土層。共同で採土を行ない平等に分ける。釉薬は地元産で、白釉、飴釉、緑釉などを調製する。
- 5) 特色ある技法は飛び鉦と刷毛目。飛び鉦は、現代では小鹿田焼と兄弟窯の福岡県・小石原〔こ

いしはら〕焼、沖縄のやちむんにしか見られない。

小鹿田焼のこれらの特徴は、この土地がはぐくんできたものです。「ここ皿山は基本的には昔も今もさして変わっていない。なにせ、小鹿田皿山は立地空間が狭く、変わろうにも変われなかったというのが本当のところであろう。現状の10軒の窯元の数の制限といい、一子相伝の伝統といい、これらはみな小鹿田皿山の自然的制約から必然的に生まれた、いわばここ特有の生きるための一種の掟なのである。ここ皿山の堅固な共同体の意識もしかりだし、みんな考え、みんなで共に作業をし、突出をけって許そうとしない姿勢もここ皿山の、長い間に培われてきた生きる知恵であり、これもやはり狭い陶郷なるがゆえの産物であった。」〔長田明彦他監修『小鹿田焼』（2012年）〕

4. 唐臼

小鹿田で一番印象に残ったのは、唐臼の音でした。唐臼は水の力を利用して陶土を細かく砕くものです。名前が示すように、朝鮮半島経由で中国から伝わりました。まるで巨大な鹿おどしです。長さ6m、直径30cmの松材の根元の方に水を溜める水船がくり抜かれ、桶で引かれた川水が水船に流れ込みます。満杯になると傾いて水がこぼれ元に戻ります。この上下動によって杵が土を砕く仕組みです。ギィ・・・ゴトン。少しの間があって、ギィ・・・ゴトン。村を流れる皿山川沿いにある45基の唐臼が、24時間働き続けています。

「日本の音風景百選」に選ばれた唐臼の緩やかな音が、小鹿田そのものなのです。ここでは時間が止まっているわけではありません。じっくりと熟成させながら、時は流れているのです。日本では、もうここでしか見られない風景です。



【③唐臼（桶の川水が長方形の水船に注がれる）】

5. 小鹿田の暮らし

小鹿田焼は陶工がひとりで作るものではありません。機械を使わず、弟子を取らない小鹿田の窯元では、家族全員で焼き物を作るのです。原材料（陶土、釉薬）もエネルギー（水力、薪）も、すべて地元で賄う小鹿田では、これが最もふさわしいやり方なのです。

土練り、蹴ろくろによる成形、飛び鉋の模様付け、登り窯による焼成など技を必要とするものは陶工である当主の仕事ですが、当主以外の家族も老若男女ひとりひとりの役割に応じて働きます。

特に、小鹿田では女性たちが大きな役割を果たしています。子育てや家事全般に加え、土づくりの作業は女性の大切な仕事です。朝は唐臼の土を返しに行くことから始まります。さらに釉薬がけ、窯詰め、窯焚き、窯出しなどの工程で陶工を支えています。

そして、小鹿田では子供や鶏さえ、自分たちの本分をわきまえています。「庭のいたるところに並べられた焼物は、その間を子供たちが遊び廻り、鶏が地面をひっかきまわしているのに、めったにこわれることがない。子供たちは焼物屋の子であり、鶏もまた多分そうなのだ。」〔バーナード・リーチ『日本絵日記』（1955年）〕



【④土づくりの作業（左：乾燥窯 右：「おろ」）】

写真左は粘土の乾燥窯。窯の上部に粘土を乗せ、窯の下の燃焼室で端材などを燃やして乾燥させます。右はその前工程。「おろ」と呼ばれる水抜き台で粘土の水分を抜きます。底が砂利と藁ムシロの透過性の構造で、水分だけ下に落ちるようになっています。

集落近くの土採り場から村民の共同作業（年2回）で採取した土は、10日ほど乾燥させてから唐臼に2週間突かせて粉末にします。粉末になった

土を水で漉して不純物を取り除き、「おろ」に移し水分を抜いて乾燥窯で乾燥させます。ここまでの土づくりの工程が女性の分担です。ていねいに作られた土から良い焼き物が生まれます。

集落の中には窯元以外の家が5戸（大工、左官屋、そば茶屋等）あり、唐臼の製作や窯の修繕など、窯元となんらかの関係があります。ここでは各家は孤立せず、今もひとつの共同体を形作っているのです。

6. 戦後の小鹿田焼

僻村の小鹿田も戦争と無縁のはずはなく、男たちは兵隊にとられ戦死者も出ました。戦争末期からの4年間、窯の火は消えました。

小鹿田が復興し始めた1950年、濱田庄司（1894-1978）がやって来ました。濱田は、村民共同での採土から窯出しに至る工程や技術の独自性を高く評価し、日田工芸指導所（後の日田産業工芸試験所）の寺川由己所長と小鹿田焼の技術をどう守るかについて話し合っています。1951年、柳宗悦が再訪し『みだりに昔を崩さぬように』と、念押ししています。寺川所長は濱田や柳の考えに理解を示し、以降、小鹿田焼の技術保存に陶工と共に協力していくことになります。



【⑤陶芸館（中央左 バーナード・リーチの大皿）】

1954年4月、英国の陶芸家バーナード・リーチ（1887-1979）が小鹿田を訪れました。これが小鹿田にとって画期となりました。彼は三週間村人たちと暮らしながら、多くの種類の器を作りました。香港生まれ日本育ちのリーチは、柳たち日本民芸運動の盟友であり、英国に帰国した後も10回以上来日しました。リーチの小鹿田での滞在時には、大勢の見物人がやってきて、村始まって以来の大騒ぎとなりました。

小鹿田に逗留して、リーチは西洋では失われた「共同体としての窯業のあり方」を知り、深い感銘を受けました。「この日私は私を再び東洋に来させるに至った真の動機といったものが、いっそうはっきりと判った。それは、巢の中の無名の工人たちを見つけ出し、彼らとともに暮らし働くことから、産業革命以来私たちが失ってしまった総体性 (Wholeness) と謙虚さを学びとるべく努めるためである。」『日本絵日記』(1955年)

神戸港から船で別府に着いたリーチを丁重にもてなしたのは大分県知事でした。小鹿田での窯明けの日には県知事やマスコミなどたくさんの人々が集まり、その後、日田市役所で講演会が行われました。そこで細田知事は、敗戦後多くの日本人と同じように方向を見失い何か頼りになるものを求めた自身の経験を語った上で、こう述べています。「あなたたちは私のなすべきことを与えてくださった。それは工藝を通じて日本の姿を保持して行くことです」『日本絵日記』(1955年)

その後、民芸ブーム(1960年～70年代)が到来し、小鹿田も広く知られるようになりました。そして製品の注文が殺到することで、窯元たちは重大な岐路に立たされます。今のままの焼き物づくりを続けていくのか、「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」〔伝産法〕の適用を受けて地場産業化し大量生産が出来るようにするのか、販路を大量販売できる業者に任せるのか等、さまざまな議論が起こります。こうした状況に対応するため日田民藝協会が1961年に設立され、日本民藝協会の指導を仰ぎました。この結果、伝産法を拒絶し、生産工程の見直しも行わないことを決め、小鹿田にとって最も大切な『みだりに昔を崩さぬように』という柳の教えは守られました。

1705年の開窯以来、小鹿田は半農半窯の集落でした。狭い田畑を耕し生活用の雑器を作って質素な暮らしをほそぼそと続けてきたのです。民芸ブームで焼き物が売れ生活が安定した小鹿田では、1960年代にはいって離農が始まり、1971年にすべての窯元が焼き物専業となりました。

そして小鹿田焼は「伝統的な陶芸技法のなかでも、工芸史上重要な地位を占めるとともに、地方的特色の顕著な工芸技術として極めて重要である」(文化庁)として、1995年、国の重要無形文化財に認定されました。2008年には民陶の原形を

保つ里として重要文化的景観にも選ばれました。

7. 小鹿田・再訪

2013年10月、九州の湯布院で17期同期会が開催(幹事:大家君)されました。天候に恵まれ絶好の同期会日和でした。宿の部屋からは由布岳がよく見えました。宴会の翌日は、紅葉の美しい久住山を越え、大観峰まで快適なドライブを楽しみました。阿蘇の雄大な眺めを堪能して現地解散。

その足で、同好の士(渡辺、恵比寿、加地)と共に計5人で小鹿田へ行きました。民陶祭(毎年10月第2土・日開催)は前日に終わっていましたが、祭りの余韻は残り、外国人を含め多くの人たちが村を訪れていました。みんなで窯元を巡り、取り皿や豆皿、茶碗など、めいめいお気に入りの器を買い求めました。



【⑥未来の陶工による抹茶サービス】

ある窯元では、抹茶が振る舞われました。リーチが言うように、この子もまた焼物屋の子です。そして一子相伝の掟に従い、彼も父の跡を継いで陶工になるのです。

今年、小鹿田へ行く予定でしたが、コロナ禍で断念せざるを得ませんでした。でもこんな時だからこそ、もう一度訪れたい小鹿田です。

【小鹿田焼 参考書】

- 1) 柳宗悦『手仕事の日本』岩波文庫
- 2) バーナード・リーチ/柳宗悦訳『バーナード・リーチ日本絵日記』講談社学術文庫
- 3) 長田明彦他監修『小鹿田焼 すこやかな民陶の美 増補版』芸艸堂

【写真①～⑥】

撮影日: 2013年10月14日 場所: 日田市小鹿田